

# 徹 選 擇 集 に 就 て

石 橋 誠 道

## 一、徹選擇撰述の動機

二祖上人が『徹選擇』を選述された動機は、法然上人の滅後『大論』を研究中、左の文を見て、選擇の眞意に徹底されたことに起因するやうである。即ち『大論三十八卷』に、「阿彌陀佛前世の時、法藏比丘なる。佛將導して遍く十方に至り、清淨の國を示し、淨妙の國を選擇して、以て自ら其國を莊嚴せしむるが如し」といふ文がある。二祖はこの文を讀んで、豁然として選擇の眞の意義、即ち別の選擇念佛が、通の念佛に通徹する深義を證得されたのであつた。即ち二祖は下の如くに識得された。

選擇本願念佛の義は、法然上人の義ではない、これ龍樹菩薩の義である。又龍樹菩薩の義ではない、法藏菩薩の義である。又法藏菩薩の義ではない、即ち先佛の義である。然しながら又先佛の義であるから即ち法藏菩薩の義である。法藏菩薩の義であるから龍樹菩薩の義である。龍樹菩薩の義であるから即ち法然上人の義であるに悟られた。即ち選擇本願念佛の義は法然上人から先佛まで、又先佛から法然上人まで通徹した一義であるに證せられたのである。『徹選擇』といふ名の起つたのもまた之に由るのである。(徹選擇 上六紙)

而して別の念佛は『選擇集』に明されてある彌陀如來の別願なる選擇本願の念佛である。通の念佛は『智度論』等に明されてある三福六度等の諸佛共通の念佛である。『選擇集』には別の念佛のみを明して、通の念佛は明されては

ないが、二祖は今『智度論』の文に依つて別の念佛が通の念佛に通徹する義を證せられたのである。即ち三世諸佛は何れの佛もみな成佛國土成就衆生の行を修行するのであるが、其は即ち三福六度等の行である。所がその成佛國土の行を成就するには、必ず不離佛、值遇佛が必要である。即ち常に佛に遇ひ奉り、常に佛を離れずして、加持護念を得るこいふ事が最も肝要である。其は恰も嬰兒が父母の愛護に依つて始めて成育する様なものである。換言すれば念佛の内に三福六度諸善萬行を修業するのである。然れば三福六度諸善萬行は皆念佛であり往生淨土の正因である。故に『觀經』には三福を説き終つて、此三種の業は、過去、未來、現在三世諸佛の淨業の正因なりと言はれてある。即ち念佛は不離佛值遇佛であり、不離佛值遇佛の成就したのは念佛三昧であり、念佛三昧に依て種々の煩惱並に先世の罪障を除き、又大福大利益を得るのである。所が阿彌陀佛は念佛三昧に依つて、淨佛國土成就衆生の行を成就し、極樂淨土を建立し、稱名念佛を以て往生の本願とし給ふたのである。又先佛も念佛三昧を以て淨佛國土の行を成就し、三世諸佛もまた其の通りであつた。之を要するに成佛國土成就衆生は、すべての菩薩の進み行くべき大道であり、その大道を進み行くには、他力本願の念佛ミ、自力萬行の念佛ミがあるが、いづれも皆な念佛であるから、その意味に於て別の念佛が通の念佛に徹するのである。即ち萬行はみな念佛であり、念佛に萬行が悉く包容さるゝのである。

然しながら其中でも別の念佛は最も勝れてあると言はねばならぬ。故に善導の『御疏』の中には、稱名念佛の行者に就て五種の増上緣、並に三緣等の義のあることが明されてある。斯様に念佛に就て甚深の義のあることがはつきりこ解つた時に、法然上人の廣學博覽の智徳か、愈よ明了になるのである。二祖は自ら考へられた。(徹選擇下初紙以下) 依て今二祖の述懐の文を左に抄出したいと思ふ。

抑も弟子某甲この徹選擇集を造つて、上人の選擇集に添る意は、深く以て其の選擇の義を述し徹せんが爲なり。之に依て彼の義底を顯さんが爲に、今この問答を致す。夫れ念佛往生を知んミ欲せば、先づ一切菩薩の淨佛國土成就衆生の

義を知るべし。又一切菩薩の本願を習ふ可し。予昔し先賢高才の人に値ひ奉つて之を習ひ之を傳ふ。然るに菩薩の位に二あり、一に三界内に住する生身の菩薩、二に三界外に出る法性身の菩薩なり。生身の菩薩は、未だ成佛國土成就衆生の行にたへず、法性身の菩薩は已に淨佛國土成就衆生の行にたゆ。茲に因て龍樹天親同くこの旨を宣へ、曇鸞天台並にこの義を存す云云。沙門某甲、昔し聖道門を學せし時、聊か彼の淨佛國土成就衆生の義を習ひ傳へ、今淨土門に入るの後、又この選擇本願念佛往生の義を相承す。二師の相傳を以て聖教の諸文を見るに、其義更に以て教文に違はず。單聖道門の人、單淨土門の人は、之を知る可らず。聖道淨土兼學の人、之を知る可し。此意を得てより、一切の大乗經を披き、一切の大乗論を見るに、隨喜の涙禁し難し。これ則ち聖教の源底なり。法門の奧義なり。佛菩薩の祕術なり。この書の上には載せ盡す可らず、委くは口傳を聞く可し。

(徹選擇  
上十紙)

## 二、徹選擇述作目的

稱名念佛往生の事は、既に『選擇集』の中に明かに記されてあるのに、何故に又重てこの『徹選擇』を作られたかといふことに就ては二の理由のあることが明されてある。一には法然上人の廣學博覽の智徳を顯さんが爲である。二には末世の邪義を却け、迷惑の人を救ふ爲である。其中まづ第一に法然上人は出家已後四十三歳の時まで、善導の『御疏』『往生要集』等に就ては、深く之を研究し、なほ其上に諸宗の碩學を訪問して、疑難を開陳し、教義を討究し、御年四十三歳の時、始て淨土宗を開き、善導慧心等の先徳に習ひ、日課念佛六萬七萬遍を稱へ給ふた。斯る智徳の成果として著はされたものが、即ちかの『選擇集』である。所がその後二祖は法然上人からその『選擇集』を頂戴し、深くこの書を研究し、また一切經、諸師の論釋等を披見されたが、この『選擇集』の正文は、經文に相ひ應ひ、念佛の妙義は、論師の釋義と少しも違はない所から、まことに法然上人の博覽廣學の智徳の勝れ給へるこゝが彌よ明かとなり、愈よ顯は

れて來たのに感服して、この書を作つたといふことが『徹選擇上卷』に記されてある。

第二には二祖上人の頃は、法然上人の門弟の中にも、『選擇集』を用ひないで、自分の新案を主張して、念佛の義を曲解し、自由勝手な解釋をして、多くの人を迷はした者が多かつた。其中には、若し選擇集の義を解しないで、唯だ念佛を稱へるならば、それは牛の吼へるようなものだ、また犬の鳴くようなものだ、それは畜生の念佛である。だから學文して義を解するのが大切であると言つたものさへあつた。そこで二祖は此等の説が大に世人を感亂するのを嘆き、後世の人々を謬らしむることを恐れて、この『徹選擇集』を作り、法然上人の『選擇集』の指導に依つて、大に口稱の念佛を勵み、決定往生の素意を達せしめようとして、この集を作つたのであると記されてある。

思ふに二祖の著述は『西宗要』を除くの外殆んごみな破邪顯正の意味が含まれてある。即ち『念佛名義集』『念佛三心要集』『授手印』の序、『淨土宗名目問答』等はみなそれである。蓋し賴朝が幕府を鎌倉に開いて武家政治を布いてから、諸種の制度の改革と共に、一般の思想も餘程自由になつたに違ひない。従つて佛教に於ても昔の殻を打ち破した新佛教が勃興した。されば同じ淨土教の中でも、自由の解釋が試られるのは當然である。だから宗祖の門下に於ても種々の解釋が行はるゝのは、無理もないことであるが、宗祖の説を繼承して、どこまでもその通りの教義を維持せんことをめられた二祖に取つては、それは甚だ大役であつた。即ち二祖の立場としては、内部では西山、幸西、親鸞等の新説があり、外部では南部、北嶺、明惠上人等の攻撃があつたから、内憂外患が一度に押し寄せた様な形であつた。然るに二祖は毅然として動かす逆か卷く怒濤の中に立つて、孤り宗祖の眞正の義を發揮せんことを勵まれたのである。その内心の鬱情が自然に悲憤慷慨の言として、二祖の著述に顯はれたのは當然である。然ればこの書の述作もまた之に由るのである。

### 三、何故に徹選擇といふ名をつけられたか

二祖上人がこの書の名をなぜ『徹選擇』とせられたかといふことは、記主上人の『徹選擇鈔上卷』に略ほ述べられてある。始め二祖上人がこの書を造られた時に、その標題に就いては頗る迷つてゐられたようである。即ちその標題を『四義集』と名けようか、若くは『徹選擇』とつけようかと思ひ煩つてゐられたが、然し余は法然上人の遺弟で『選擇集』傳授の身であるから『徹選擇』と題する方が宜しからう、即ちかの『選擇集』の念佛の義を述べ徹する意味であるからと仰せられた。所が其書には（此は徹選擇の下卷）少しも『選擇集』の意が述べられてない、主として四義が明されてある。四義とは一切衆生が念佛して往生するには種々の理由があるが、その中主要なるもの四義をあけて説明されてある。一には菩薩の別願であるからだ二には菩薩の巧方便であるからだ。三には淨佛國土成就衆生の故である。四には佛智不思議の力に依るのである。斯様に四義が明されてゐるから標題と内容とが違つてゐる譯である。この點に於て二祖も標題に迷はれたのであつた。

そこで三祖が其時に、されば『選擇集』の大意をば更らに其上に釋し添へられてはさうですか、それならば標題と内容とが背かないでいゝでせうと申された。これに依つて二祖もその通りに更に上卷を作つて『選擇集十六章』の要領を述べて、下卷に添へて『徹選擇』といふ標題を置かれたのである。

已上は三祖の『徹選擇』鈔の説であるが、この諸に就てやゝ不審に思ふのは、この説に依れば初に下卷が出来るて、上卷は後に添へた事になつてゐる。所がこの集の上卷の奥書には、「時に嘉禎三年歲次丁酉六月十九日、安居念佛中先師報恩の爲め、末法衰愍の爲に之を記す」と書かれてあり。その下卷の奥書には、「時に嘉禎三年歲次丁酉六月二十五日、安居念佛中八旬の窮老謹んで之を記し畢んぬ」と述べられてある。この記に依れば上卷が先に書かれたことになつてゐる。勿論『徹選擇鈔』の説はそれを前に草稿を書かるゝ時の話かも知れないから奥書の日附はあてにならないかも知れぬが兎も角之れが不審の第一である。次に今一つの不審は、二祖がこの書を作られた動機も考へらるゝ『智度論三十八』の文が上卷に引かれてあり、『徹選擇』を作る理由がみな上卷に記されてあることである。若し下卷が先きに出來たことすれば

遺書の理由が下巻に何ぞか書かるべきが當然だ。然しこれも又ぎのようにも解釋は出来るが兎も角不審の第二である。

さりながら三祖記主禪師の傳を見るに三祖は嘉禎二年の九月、鎮西に至つて二祖上人に逢ひ、同三年七月六日、持に善導寺の塔の中で淨土の宗義を相傳されたのである。その相承の詞を見るに、法然上人淨土宗の義を以て辨阿に傳ふ、今又辨阿相承の義並に私の『勳文徹選擇集』を以て沙門然陀に讓與し畢れり、之を聞かん人は慥かに之を信じて、之を行ひ往生を遂ぐ可し、仍て秘法を録するの狀、手次を以てす、時に嘉禎第三歲八月一日、法然上人口決沙門辨陀あるからこの『徹選擇』は三祖が二祖の傍に居られた時の著述であり、又最も鄭重に相傳された書物であることは言ふまでもない。斯る點から考へて『徹選擇鈔』の説は輕々に批判することは出来ないが一應不審を述べた譯である。而して三祖はこの年八月下旬に二祖の膝下を辭して故郷に歸られたが、二祖はその翌年嘉禎四年二月二十九日に示寂されたからこの『徹選擇集』は二祖の著述としては最も晩年の著述である。

#### 四、菩提心に就ての辯解

宗祖大師が『選擇集』の三鞏章に於て菩提心を以て所廢の行として斥け給ふた所から、明惠上人を始として聖道諸宗は擧つて此義を非難したことは今更辯する必要もないが、その菩提心に關する攻撃に對して、今この『徹選擇』の中に我宗の立場が明かにされてあるから、その事に就て少し述べてみたいと思ふ。即ち此書の上巻に非難者の説を擧げて斯う言はれてある。

「近代有人の曰く、夫れ菩提心は大乗の慈父、菩薩の悲母なり。佛海の源底法門の奥藏なり。菩提心を發さずんば菩薩の功德成就すべからず。菩提心を發さずんば如來の正覺満足すべからず。然るに今『選擇集』の意は、但だ念佛の一行を以て、其往生の淨業となして、菩提の祕術を具足せしめず。既に大乘の教理に違し、又菩薩の巧度に背けり。若し然らば

大乘の教なりと雖も、菩薩の行を去る。何ぞ往生極樂を遂げんや」と

この非難に對する二祖の答辨は斯うである。この非難は甚だ愚な考である。菩提心には二種がある。一には凡位の菩提心、二には聖位の菩提心である凡。位の菩提心の中にまた二種がある、一には薄地の凡夫の菩提心、二には六度の菩薩の菩提心である。薄地の凡夫の菩提心とは、一華、一香、一稱、一禮の功德を以て佛道を成就せん願うのである。六度の菩薩の菩提心とは、萬行諸波羅密一切の善根を修して佛果を成就せん願うのである。又菩提心に二種がある、一には菩提心願、二には菩提心行である。その中菩提心願とは四弘誓願である。菩提心行とは六度萬行である。

今我宗の意は、薄地の凡夫底下の我等は、ミても斷惑證理の觀行は出来ないから、入聖得果することは出来ない者である。この故に念佛の一行を修して、先づ始めに淨土に往生したい願ひ、次に遠く佛果に到らん願うのである。だから此は菩提心願である。これと同様に、衆生無邊誓願度も、法門無盡誓願知も、無上菩提誓願證も皆な念佛の一行を修して淨土に往生して後に、成就せん願うのである。故に是れ亦た菩提心願である。即ち今時の吾々凡夫は機根が甚だ下劣であるから、菩提心願を發しても、ミても菩提心行を實行することが出来ないのである、決して菩提心を否定し廢捨する意味ではないが、實際に實行の出来ないのをいけません。然れば汝の非難攻撃は、的はずれた攻撃である。

選擇集の眞意を充分に了解せぬ愚論であるを辨解されてある。(徹選擇  
上十四紙)

## 五、徹選擇集著述の態度

『徹選擇』の書き振りは、其標題の如く『選擇集』の意義を今一つ徹底さす積りであることは言ふまでもない。即ち宗祖の擧げられた八種の選擇に、二祖はこの外二十二種の選擇の義を加へられた。またその本願念佛が、別の念佛から通の念佛に徹する旨を明されたことは前に述べた通りである。即ち『選擇集』改造しようとする態度でもなく、批判しよう

こする態度でもない、之を仰げば愈よ高しといふ全く信仰的の態度である。彼の『念佛三心要集』に弟子辨阿が爲には法然上人を以て大師釋尊に仰ぎ奉るに述べられた態度である。即ち『選擇集』を讀んで後に、他の經論疏釋を讀めば讀むほぎ、愈よ『選擇集』に潜んである深遠の理が明白になつたその趣を書き綴つたのが『徹選擇』である。又この中に當時の邪義を排斥されてはあるが、然しそれは、直ちに此書を公にして、破邪顯正に供へんしたものではない、全く之を三祖に傳へ次で末代に相ひ傳へて以て宗祖已來の相承の信念の確立に資せんことを企てられたのである。

又菩提心の辨解等も一見當時の非難に對して、辨解せられた如うにも見へるが、其實我宗の立場を明了にされたのであつて、對他を自的にせられたのではないやうだ。之を要するにこの著述は、『選擇集』に對する正當の義を後世に傳へんと努められたものと見るべきである。